

# スペイン語の思弁的現在について

三 好 準 之 助

## 要 旨

現代スペイン語では、接続詞 *si* で形成される条件節には、接続法現在（完了）の動詞も、直説法未来（完了）の動詞も使われず、直説法現在が使用される。その用法について、三好（2020）は詳細に検討し、その直説法現在の表現的機能は思弁的現在であるという仮説を提示した。本稿は、そのような思弁的現在が *si* 条件節以外のどのような表現で使われているのかを探る試論である。その結果、習慣的現在や歴史的現在は思弁的現在 A に対応し、三好（2020）で提示された思弁的現在、格言的現在、*por poco* とともに使われる叙述的現在、未来指示的現在は思弁的現在 B に対応する、という結論に達した。

キーワード：直説法現在、現実世界、思弁世界、*realis/irrealis*、思弁的現在（A, B）

## 1. 思弁的現在とは

三好（2020）は、現代スペイン語の *si* 条件節で使用される動詞の時制に関する制約、すなわち、そこには接続法現在（完了）の動詞も、直説法未来（完了）の動詞も使われず、直説法現在が使用される点に注目し、この直説法現在で表現されている事柄を詳細に検討した。その結果、*si* 条件節で使用される直説法現在は、話者（や著者）が、その発話時（記述時）において、現実世界で起こっている具体的な出来事を説明しているのではなくて、話者が、その発話時において、自身が有している情報（知識）のなかで形成した、すなわち現実世界の事柄として知覚される出来事としてではなくて、話者が頭のなかだけで思いめぐらす思弁世界で構成された命題を説明している、ということが判明した。そして三好（2020）は、その直説法現在の表現的機能は思弁的現在であるという仮説を提示した<sup>1)</sup>。

そもそも、条件を表現する接続詞 *si* は、その条件節の事柄を仮定であるとみなす機能を持っている（三好 2020: § 2.2.1）。仮定された事柄とは、現実世界で起こる具体的な事柄ではない。話者が自身の持っている情報を組み立てて形成した事柄、すなわち思弁世界の命題である。そのような事柄を提示する思弁的現在は、以下のような2種類の特徴を備えている。

まず、*si* 条件節で表現される内容は発話時の現在の事柄であったり、過去時の事柄であったり、未来時の事柄であったりする。すなわち全時的事柄を表現することができる（三好 2020: § 2.4）。現実世界で起こる事柄を認識するときの時間的な区分である過去・現在・未来という情報が反映されていない。発話時に話者の頭のなかにある思弁世界の事柄を説明しているので

ある。

つぎに、si条件節には接続法現在（完了）の動詞も直説法未来（完了）の動詞も使われないという事実は、直説法現在で表現されるsi条件節の事柄が、話者が現実世界で起こる事柄の起こり方に関して抱く否定的認識モダリティを表現しないことを意味する。この意味は、現実世界で起こらない、起こるかもしれない、起こらなかった、などの叙法的意味が表現されない、ということである。すなわち、話者が発話時に知覚の対象とする、眼前で展開される現実世界の事柄としてではなくて、頭のなかの思弁世界で組み立てられた思考の内容を表わす命題を表現していることになろう。

三好（2020）ではsi条件節の直説法現在について考察した結果、その場合には思弁的現在という用法であるという説明原理を提案した。直説法現在のこのような用法はsi条件節以外の文脈ではどのように使用されているのであろうか。本稿はその状況を検討する試論である<sup>2)</sup>。

## 2. スペイン語の直説法現在の時制の用法

では、スペイン語の時制である直説法現在にはどのような意味表現の機能があるとされているのであろうか。先行研究のいくつかを紹介しよう。

### 2.1. 現在時制の慣例的な用法説明

ヴァインリヒ（1982: 49）によれば、スペイン語を含むヨーロッパの諸言語の文法書において、現在という時制の用法の説明は、「その第一項では、現在は現時点を表わすとあり、第二項では、それは習慣を表わす、と述べられている。第三項では、それは無時間的な事柄を表わすとされ、第四項とそれに続く項では、過去と未来を言い表すこともある、と述べられている」という体裁に従っているそうである。この指摘を念頭に置いて、スペイン文法の用法説明を検討していこう。

### 2.2. 現在時制の具体的な用法説明

スペイン語の現在時制の用法に関する具体的な説明である。

#### 2.2.1. Gili Gaya（1973）

まず、スペイン文法の古典的な解説書であるGili Gaya（1973: §121）を見てみよう。彼が説明する直説法現在の用法は、要約すると以下の8種類になろう。

- ① 現在時制は未完了の時制であり、発話時と共起する行動を表現する。それゆえ、非時間的な（intemporal）真実を表明する。たとえば、La suma de los ángulos de un triángulo es

igual a dos rectos. 「三角形の角度の総和はふたつの直角に等しい」。

- ② 発話時と共起する未完了の継続的な行動を表現するときは現実的な行動を表現する。たとえば, El niño duerme. 「その子は眠っている」。
- ③ 発話時と共起する不連続な行為なら, 習慣的な意味を表現する。たとえば, Me levanto a las siete. 「私は7時に起きる」。
- ④ 過去時制の代わりに使われる歴史的現在がある。たとえば, Colón descubre América en el año 1492. 「コロンブスは1492年にアメリカを発見する」。
- ⑤ 未来の出来事に言及するときに現在時制を使うことができる。たとえば, María se casa. 「マリアは結婚する (ことになっている)」。
- ⑥ 未来の出来事を表現することができるので, 疑問形で承認を求める用法がある。たとえば, ¿Me voy? 「私は行ってもいいですか」。
- ⑦ 未来の出来事を表現することができるので, 命令表現が可能になる。たとえば, Vas a las Bárdenas — prosiguió con firme acento el de Lerín. 「『お前はバルデナスに行くのだ』とレリンの人は確固たる口調で続けて言った」。
- ⑧ 未来の出来事を表現することができるので, si 条件節で使われる。たとえば, Si mañana hace buen tiempo salgo. 「明日天気が良ければ, 私は出かける」。si 条件節に未来時制が使えないのは, おそらく, 未来時制にはもともと持っていた義務の意味が残っているからであろう。

以上のように, Gili Gaya は直説法現在について, 発話時と共起する行動の表現として①, ②, ③の用法を, 過去の出来事を表現する④を, 未来の出来事を表現する⑤, ⑥, ⑦, ⑧を提示している。発話時と共起する出来事の表現では, 話者が発話時に自身で知覚できる行為の表現としては②が典型的である。①の非時間的な真実は発話時に話者の知識のなかにある事柄であり, ③で表現される習慣的な行為も, 話者が発話時に自身の感覚で知覚できる行為ではなく, 発話時に話者が持っている知識のなかにある事柄であろう。⑥の承認を求める表現では疑問表現の文型がその条件になり, ⑦の命令表現では独特の口調が条件になろう。これらの⑥と⑦の用法は, 直説法現在という時制が持っている表現機能ではなくて, 特定の文脈情報によって成り立っている。筆者には, ⑧の用法も si 条件節という文脈情報によって成り立っているが, そこでの未来時制の使用不可の理由は納得できない。その代わりに, 筆者は三好 (2020) で思弁的現在という考え方を提案した。

### 2.2.2. Butt et al. (2019)

Butt et al. は英語話者を対象にして編纂された参照文法書である。その17章3節 (pp. 205–208) で直説法現在という時制の用法が列挙されている。要約すると以下の9種類になろう。

- ① 無時間的な (timeless) 真実やまだ起こることのある習慣的な状態を指す。たとえば, *Llueve mucho en Irlanda*. 「アイルランドでは雨がよく降る」や *Fumo más de cuarenta al día*. 「私は日に40本以上のタバコを吸う」。
- ② 発話時に起こっている非連続的な行為を表現する。たとえば, *Escribe una novela*. 「彼(彼女)は小説を書いている」。
- ③ 発話時に起こっている連続的な行為を表現する。たとえば, *Parece cansada*. 「彼女は疲れているように見える」。
- ④ ごく最近の出来事や今にも起こりそうな出来事を表現する。たとえば, *Merino pasa la pelota a Andreas*. 「メリノはアンドレアスにボールを渡した」や *Me caso*. 「私は結婚する(つもりだ)」。
- ⑤ 歴史的現在を表現する。たとえば見出しの *El Papa carga contra el laicismo de España*. 「教皇がスペインの世俗主義を攻撃」のように, 「ほとんど, もう少しで」の意味の *por poco* や *casi* の後ろで *Me caí por unas escaleras y por poco/casi me rompo el tobillo* 「私は階段を数段転げて, もう少しでくるぶしの骨を折るところだった」のように, また「まだない」の意味の文脈で *El tren no llega*. 「列車はまだ着いていない」のように使われる。
- ⑥ 命令表現で使われる。たとえば, *Tú te callas*. 「君は黙っておれ」。
- ⑦ 許可を求めるために使われる。たとえば, *¿Te lo mando yo?* 「それをお送りしましょうか」。
- ⑧ 未来時制として使われる。たとえば, *Mañana vamos a California*. 「私たちは明日カリフォルニアへ行く」。
- ⑨ 「最初である」という意味の表現で使われる。たとえば, *Es la primera vez que la veo*. 「私が彼女に会うのはこれが初めてである」。

発話時に起こる, 起こった, あるいは起こりうる出来事の表現として, ①, ②, ③, ④の用法があるが, 話者が発話時に現実世界で起こっていると知覚できる出来事は②と③であろう。①と④の場合, 表現されるのは, 基本的に, そのような知覚ができる出来事ではない。⑤は過去の出来事を表現する歴史的現在の用法である。⑥の命令表現や⑦の許可を求める表現でも, 話者はその表現されている出来事を, 発話時に現実世界で起こっていると知覚することはできない。⑧は未来時制の代わりに使われる現在時制である。⑨は英語表現との比較で注意を促す使い方であろう。スペイン語では話者が発話時に現実世界で起こっていると知覚することができる出来事として, 直説法現在で表現される。

なお, Butt *et al.* は, *si* 条件節での直説法現在の使用には別の節「開放条件 (open condition)」のところで言及している (2019: § 29.2)。

### 2.2.3. RAE-ASALE (2009)

現代スペイン語の時制である直説法現在の用法に関する、『新スペイン文法』の説明である。以下のように8種類に要約して紹介する。RAE-ASALEは現在時制(CANTO)の用法を、発話時基点の表現(§23.5)と過去指示・未来指示の表現(§23.6)に分けて説明している。

まず、発話時基点の表現(§23.5)である。その用法は直示的(deictico)な性質を帯びている。直示的現在の用法である。

- ① 点的現在(presente puntual)。発話時点で起こる出来事を表現する。El delantero sale al terreno de juego.「前衛が競技場に出た」など(§23.5a)。
- ② 線的現在(presente continuo)。発話時を含む継続的時間の出来事を表現する。Necesita justificarse con este asunto de la madre.「彼は母親のこの件で釈明する必要がある」など(§23.5d)。
- ③ 総称的現在(presentes genéricos)。人や事物の特徴的な性質や状態を表現する。この用法は間接的のみ直示的であって、表現される事柄の発話時との関連性については意見が分かれる。そのひとつに習慣的現在(presente habitual)がある。Se levanta muy temprano, medita, desayuna, lee los diarios, [...]「彼(彼女)は早朝に起きて考えを巡らせ、朝食をとって新聞を読み、(...)」など(§23.5c, §23.5g)。また、Caracas es la capital de Venezuela.「カラカスはベネズエラの首都である」のように、人や事物の特質を示す描写的現在(presente descriptivo)も含まれる(§23.5j)。
- ④ 格言的現在(presente gnómico)。無時間的・普遍的真実を述べる。El hombre es mortal.「人は死ぬものである」や Dos y dos son cuatro.「2足す2は4である」などであるが、そこで肯定されていることは発話時と結びつけられない(§23.5l)。

つぎに過去指示・未来指示の表現(§23.6)である。

- ⑤ 歴史的現在(presente histórico)。発話時を過去時に移す用法である。En 1899, Romeu interviene [...] en una fiesta [...].「1899年、ロメウは(…の)ある集いに(…)参加する」など(§23.6a)。
- ⑥ 分析的現在(presente analítico)。発話時以前に起こった、あるいは書かれた出来事を、話者や著者が分析して自身の知識として認識し、絶対的真だと思ふときの言明である(§23.6e)。Lo expresa muy bien el profesor Giovannini: “Es un hecho [...]”「ジョバンニニ教授はそのことをとてもうまく次のように表現している。『(…)の事実である』」など。分析的現在に近い用法に、新聞の見出しや写真に付けるキャプションの「表象された事実の現在」(presente de hechos representados)がある(§23.6d)。En la foto, Tito es recibido por Nixon,

1971 [...]「写真では1971年、チトーがニクソンに迎えられる」など。

- ⑦ 語りの現在 (presente narrativo)。Ayer mismo me dio un horroroso susto [...]. Pues llego a casa, entro en el corral y me dice Eulogia que [...].「私はまさに昨日、腰を抜かすほど驚いた (...)。それというのも、私ที่บ้านに着き、囲い場に入ると、エウロヒアが私に (...) と言った」のように、過去の出来事を現在の出来事のように述べる文体的表現手段である (§ 23.6k)。副詞の por poco, a poco, casi は、叙述的現在の解釈に力を貸す。たとえば El patatús duró a Trueba tres semanas y por poco lo despacha a otro mundo [...]「トゥロエバは3週間のあいだ気を失っていたので、もう少しであの世行きになるところであった」がある (§ 23.6m)。
- ⑧ 未来指示的現在 (presente prospectivo)。この用法では、未来時の出来事の生起が疑われない約束や計画の表現に使われる。出来事が未来時に起こることを指す補語の存在がその解釈を確かにする。たとえば Me voy dentro de dos meses.「私は2か月後に出発する」がある (§ 23.6n)。現代語では未来時制が認められない条件文の前件における現在時制も未来指示的現在である (§ 23.6p)。

以上が、RAE-ASALE (2009) で説明されている直説法現在の使い方の要約である。①から④までの用法が発話時基点の直示的用法としてまとめられている。そして現在時制で過去の出来事を表現する用法が⑤、⑥、⑦、未来の出来事を表現する用法が⑧である。これらの用法は、「今ここ」を座標軸の基点に位置づけるという特徴が直示的表現の基本であるとすれば、⑤、⑥、⑦は過去時制で、そして⑧は未来時制で表現されるはずである。RAE-ASALE (2009) ではこれらの用法をそのようになっていないという意味で、①～④とは別の用法として扱っている。この意味において、本稿ではこれらの用法を非直示的用法と呼ぶことにする。

発話行為における直示性とは、基本的に、表現される出来事を話者の「今ここ」を基点とした座標軸上の位置づけのことである。この意味で問題なく直示的であると認められる用法は①の点的現在と②の線の現在であろう。③の包括的現在では、習慣的現在の場合、直示性は間接的であって、表現される事柄の発話時との関連については意見が分かれる、と指摘されている。③の用法は発話時基点の現在時制であるが、習慣とは発話時の以前にも以降にも行なわれるはずの行為や状況である。以前なら過去時制で、以降なら未来時制で表現されることになろう。それが現在時制で表現されているという意味で、間接的にのみ直示的であるということになる、と筆者は理解する。

問題は無時間的・普遍的真実を述べる④格言的現在である。「2足す2は4である」などの文は、その発話を含む伝達行為の場面（すなわち「今ここ」が基点になっているかどうか）を考慮することなく（すなわち過去時の文脈においても未来時の文脈においても）その意味を理解することができる。筆者は格言的現在の用法は非直示的であると解釈する<sup>3)</sup>。

### 2.3. 現在時制の用法のまとめ

現在時制の3種類の具体的な用法説明を上記2.2で紹介した。おおむね、2.1の体裁に従っている。まとめてみると、以下の5種類になろう。

#### 2.3.1. 直示的現在

まず、2.2.3のRAE-ASALE(2009)が示唆している直示的現在の用法がある。確かにこの用法であると解釈されるのは、RAE-ASALEの①と②の用法である。2.2.1のGili Gayaでは①と②、2.2.2のButt *et al.*では②、③、④が相当しよう。Butt *et al.*の⑨の用法は、発話時に現実世界で起こっている出来事の説明であるから、直示的現在の一種であると判定される。本稿では、発話時基点が明確に発話の「今ここ」である場合の表現だけを、直示的現在として扱う。

#### 2.3.2. 習慣的現在

Gili Gayaの③、Butt *et al.*の①、RAE-ASALEの③である。

#### 2.3.3. 格言的現在

RAE-ASALEの④の無時間的・普遍的な真実を述べる用法である。Gili Gayaでは①の「発話時と共に起る行動の表現」に含まれている。Butt *et al.*でも①の「無時間的な真実」の表現として含まれている。

#### 2.3.4. 歴史的現在

Gili Gayaの④、Butt *et al.*の⑤の用法である。RAE-ASALEでは⑤の用法であるが、そこには、その変種として⑥分析的現在と⑦叙述的現在の用法が分類されている。

#### 2.3.5. 未来指示的現在

Gili Gayaでは⑤の用法であるが、発話時にはまだ起こっていない出来事を表現するという特徴から、その変種の用法として、承認を求める⑥、命令表現の⑦、si条件節の⑧の用法が含まれている。Butt *et al.*では⑧が未来時制として使われる用法であるが、それに、命令表現の⑥、許可を求める⑦が変種の用法として含まれている。RAE-ASALEでは⑧の用法である。

## 3. 現在時制の用法の再検討

上記の2.3でまとめられた現在時制の諸用法を、それに関連する先行研究の情報を考慮しつつ、再検討してみよう。

### 3.1. 関連する先行研究の情報

直説法現在という時制が表現する用法の意味を考えると、以下の指摘が先行研究の考慮すべき情報となる。

#### 3.1.1. 現在時制と直示的基準

Lyons (1977: 678-681) によれば、言語によって出来事を表現する者は、時に言及するとき、少なくとも2種類の異なった枠に関連づけている。直示的 (deictic) 基準と非直示的 (non-deictic) 基準である。時制は直示的基点という枠で時に言及する。時制を持つ言語の表現における時のとらえ方では、直示的基点が基本的であり本質的であるが、それらの言語で表現される文には直示的基点ではない場合もありうる (非直示的基準)。無時間性 (timelessness) や全時性 (omnitemporality) の表現である。さらに、Lyons (1977: 687-689) によれば、時制は、伝統文法の解釈ではアスペクトも含む。時制は直示的基点に従うが、アスペクトは非直示的基点に従う。無時間的な命題や全時的な命題は、英語では現在時制の文で表現される。無時間性は時への言及 (直示的基点であるかどうか) を問題にせず、数学や神学の永遠の真理などの特徴となる。全時性では過去・現在・未来において真理値が変わらない。英語では、現在時制で表現される、アスペクトが無標の、単なる非過去時の文 (John sings. など) は、発話時の出来事に言及していると解釈されることがごく稀なのである<sup>4)</sup>。

以上がLyonsの説明である。最後の「英語では」のところの、現在時制が発話時の出来事に言及していると解釈されることがごく稀であるという指摘は、現在時制に関するヴァインリヒの別の視点からの解釈とも一致する。ヴァインリヒ (1982: 49) は本稿の2.1で引用された箇所において、「現在が単に現時点を意味するのではないことをこれ以上明確に述べているものはない。現在は時制の一つであり、説明の諸時制のうちで最も多く用いられるものである」と述べているからである。

#### 3.1.2. 現在時制と *realis/irrealis*

Comrie (1985: § 2.1) は、現在時制の用法を説明するときに、以下のように述べている。

現在時制は発話時に起こっている出来事を表現する。遂行文や実況放送文や説明文に使われる。しかしながら、現在時制で構成される文は、発話時に限らず過去や未来にも言及することがある。その現象は、文構造の時制以外の特徴や現実世界に関する我々の知識によってもたらされる含意 (implicature) によって起こる。そのような時制以外の特徴のひとつにアスペクトがあるが、進行相などはその文が瞬時の事柄ではないことを要求するし、我々の現実世界に関する知識はその文の内容が発話の現時点のみを指すのか過去や未来も指すのかを決める。



多くの言語で現在時制が習慣的というアスペクトの意味を伴って使われる。しかし習慣性を時制の対立によって表現する言語は存在しないし、全時的な真実を表現する普遍的な時制も習慣的な表現を行なう時制も存在しない。Cows eat grass.などの文は現在時にのみ言及しているのであり、それが普遍的な真実であるという解釈は、構文的要素や言語外的要素に基づいて起こるのであって、そのように解釈される内容は現在時制が意味するところではない。

習慣的な状況を記述するとき、ダイルバル語 (Dyirbal) のように、現在時制以外の形式を持っているような言語も存在する。この言語には2種類の基本的な動詞の定型があって、ひとつは現在・過去時制であり、もうひとつは未来時制であるが、後者は習慣的な陳述に使用されることになる。この2種類の時制の相違（あるいは単なる現在時の出来事と習慣的な出来事の違）は、叙法のひとつである *realis* / *irrealis* で記述される。*realis* とは、進行中とか過去に観察された状況の表現に使う叙法であり、*irrealis* とは、その他のすべての状況の表現に使われる叙法であるが、過去の観察から一般的な習慣の叙述までを帰納的に一般化して提示される状況のために使われる。

以上が Comrie の説明の要約である。彼は、単なる現在時の出来事と習慣的な出来事の違は、叙述様式 (叙法のひとつ) の *realis* / *irrealis* で記述される、と述べている。では、このような叙述様式は、話者がどのように解釈している事柄を表現するのであろうか。

### 3.1.3. 叙述様式の *realis/irrealis*

他方、様々な言語における *realis* と *irrealis* の表現について考察している Elliott (2000: 56) によれば、この叙述様式が表現する様々な用法に通底する意味的役割は、*realis* が知覚される現実世界の出来事に対応し、*irrealis* が概念的思考とか仮定的観念の出来事に対応する、ということである。言い換えれば、*realis* で表現される文は、出来事の事実に基づく現実世界の、知覚された確かさのある文であり、*irrealis* で表現される文は、出来事が単に想像された、或いは現実でない世界にあると知覚された文である (2000: 67)。視点を変えて説明すると、出来事の含む現実性が現実の世界にあるという単純な事実が *realis* の使用を支えているし、出来事その他の複数の世界に属しているかもしれないときに *irrealis* が使われる、ということになる (2000: 68)。

また Elliott (2000: 69-70) は、*irrealis* の意味的文脈として、可能な出来事、条件となる出来事、モダリティでその資格を与えられる出来事、命令される出来事を挙げている。それらに加えて、いくつかの意味的文脈が追加されるが、それらは否定の表現、習慣の表現、疑問の表現である<sup>5)</sup>。

Elliott によれば、この叙述様式が表現する様々な用法に通底する意味的役割としては、*realis* が知覚される現実世界の出来事に対応し、*irrealis* が概念的思考とか仮定的観念の出来事

に対応する，ということである。

Elliott が「習慣的な出来事」を *irrealis* で表現される意味的文脈のひとつであるとしている点は，上記の Comrie の指摘と一致している。筆者もこの解釈方法に与するものである。そして筆者が思弁的現在という解釈方法を思いつく動機になった「仮定されて起こる出来事」もその意味的文脈のひとつとなっている。

### 3.2. 直説法現在の用法の確認

上記の 2.3 で紹介されたスペイン語の直説法現在の用法に関連して，以下の 2 点を確認しておく。

#### 3.2.1. 歴史的現在に関連して

上記 2.3.4 の歴史的現在について，Gili Gaya (1973: 155) は，過去時制の代替としての現在時制の使用は歴史的現在と呼ばれているが，それは過去の行為を現在時に合わせることで過去の行為を一層生き生きと話し相手に提示するのであるが，このとき，話し手は頭のなかで (*mentalmente*) 過去時に移動するのである，と述べている。そして歴史的現在は，一種の心的な接近 (*acercamiento psíquico*) によって，未来の出来事にも言及することができる，と解釈している。すなわち，上記 2.2.3 の RAE-ASALE の⑧未来指示的現在の用法の成立する動機を⑤の歴史的現在が成立する動機と同等視している。

他方，Butt *et al.* (2019: § 17.3.5) は，歴史的現在は過去の出来事に言及して物語を劇的に表現する手段であり，英語よりもスペイン語のほうが，使用頻度が大きいことを述べたあとで，このように使う現在時制が *por poco* 'all but' (ほとんど) のあとでほぼ常に使われることを指摘している。この解釈は，上記の RAE-ASALE (2.2.3) の用法の⑤歴史的現在と⑦叙述的現在とをひとつの範疇として扱っていることになる。

さらに，Rojo *et al.* (1999) は，編年体の時は出来事の起こる時であり，言語の時 (時制) はゼロ点の設定のもとで定まるのであるが，もともとは発話時と一致するこのゼロ点は移動する，とする (1999: 2872-2873)。このゼロ点の再方向付けに関連する用法が歴史的現在であり，この用法ではゼロ点が過去時に移動しているのである。歴史的現在が成立する理由の解釈としては，このゼロ点の再方向付けのほかに，時制体系のなかの現在時制が中和的意味を持っているからであったり，現在時制形に想定される無時間性の証拠であったりする (1999: 2891-2892)。これらは，歴史的現在という用法についての，叙述様式の *realis* / *irrealis* とは関係のない解釈であろう<sup>6)</sup>。

#### 3.2.2. *por poco* について

上記の Butt *et al.* (2.2.2) は⑤歴史的現在のところで，その用法は *por poco* の後ろで見られ

る、と述べている。また、RAE-ASALE (2.2.3) の⑦叙述的現在では、そのような用法であるという解釈に力を貸す副詞に *por poco* がある、とされている。この副詞の使い方を確認しておこう。

*por poco* という副詞は、スペインのアカデミアの辞書 DLE (2017) では *Tropezó y por poco se cae*. 「彼はつまずいたが、もう少しで倒れるところであった」という例文とともに、もう少しで何かが起こるところであったことを意味するが、*Iba tan abstraída que por poco no la atropella un coche*. 「彼女はとても安心していたので、もう少しで自動車に轢かれるところであった」という例文を出して、動詞の前に位置すると虚辞の否定語の出現を認める、という指摘が為されている<sup>7)</sup>。

DLE の、この現代スペイン語における *por poco* の使い方の説明では、その使い方が十分には理解できない。3種類の語義を提示している高垣 (監) の『西和中辞典』(2007) の説明のほうが、実際の使い方がよくわかる。その3種類の語義は、「①<+直説法現在>もう少しで[すんでのところで] …するところだった。Por poco me caigo. 「私はもう少しで転ぶところだった」。②わずかの差で。Ha perdido por poco el Partido. 「彼(彼女)は惜しいところで試合に負けた。③ささいなこと」である。実際、現代スペイン語のコーパスである CREA でその用例をチェックすると、この3種類の語義で使われていることがよくわかる。そして本稿で取り上げる用法は、その第1義である。

Beinhauer (1978: 365-366) は、過去の出来事の記述に、想定されるはずの過去時制ではなくて現在時制を使うことでその表現に鮮やかさを表明する、という指摘をしており、そうすることで話者は語っている事柄を再び体験すると考えている、と解釈する。そして非現実的な条件文の帰結節での直説法現在の使用に言及するが、条件文の両節(条件節と帰結節)において現在時制を使うのが最も普通であると指摘している。そしてまた、このような直説法現在の用法には、そのような指示がなくて現実性と非現実性の区別もない直説法現在が常に使用される用法がある。それは事態がほぼ起こるところであったことを意味する文導入型式の *por poco* による表現である、と述べている。

筆者は三好 (2020) において、*si* 条件文における直説法現在が思弁的現在である、と仮定した。そして Beinhauer では、そのときの時制と *por poco* が導入する直説法現在の時制が関連づけられている。すなわち、*por poco* の直説法現在の時制も思弁的現在である可能性が示唆されたことになる。

### 3.3. 直説法現在の用法の再提示

Lyons (3.1.1) によれば、言語によって出来事を表現する者は、時に言及するとき、少なくとも直示的 (deictic) 基準と非直示的 (non-deictic) 基準という2種類の異なった枠を考えている。現在時制にもこの2種類の基準がかかっている。直示的現在と非直示的現在(その他

の無時間性や全時制の表現)である。

他方、Comrie (3.1.2) は、多くの言語で現在時制が習慣的というアスペクトの意味で使われるが、習慣性を時制の対立によって表現する言語は存在しないし、全時的な真実を表現する普遍的な時制も習慣的な表現を行なう時制も存在しない。そのように解釈される内容は現在時制が意味するところではなくて、叙述様式の *realis* / *irrealis* に依拠している。*realis* とは、進行中とか過去に観察された状況の表現に使う叙述様式であり、*irrealis* とは、その他のすべての状況の表現に使われる叙述様式であるが、過去の観察から一般的な習慣の叙述までを帰納的に一般化して提示される状況のために使われる、と述べている。*realis* が進行中の出来事を表現するときには現在時制の直示的現在の表現になるとすれば、過去に観察された状況の表現には過去時制(ヴァインリヒの「語り」の時制)が使われることになる。そして *irrealis* はその他すべての状況の表現に使われる叙述様式である。それは現在時制の非直示的現在の用法も *irrealis* の表現である、ということになる。

さらに、この *realis/irrealis* という叙述様式については、Elliott (3.1.3) が、それが表現するさまざまな用法に通底する意味的役割は、*realis* が知覚される現実世界の出来事に対応し、*irrealis* が概念的思考とか仮定的観念の出来事に対応する、と述べている。発話時に知覚される現実世界の出来事が直示的現在で表現されるとすれば (*realis*)、概念的思考とか仮定的観念の出来事は非直示的現在で表現されることになる (*irrealis*)。

筆者は三好(2020)で、*si* 条件節で使用される直説法現在について、現実世界の事柄として知覚される出来事としてではなくて、話者や著者が頭のなかだけで思ひめぐらす思弁世界で構成された命題を説明しているその表現的機能を、思弁的現在と呼ぶことにした。そして今回、上記の検討の結果、非直示的現在が、筆者の思弁的現在に相当することが判明した。

その非直示的現在で表現されているのは、Elliott によれば概念的思考とか仮定的観念の出来事である。筆者が2020年に提案した思弁的現在には、その一部の仮定的観念の出来事だけにしか対応していない。

本稿では、Elliott の解釈に従って、以下のように考える。まず、現実世界で起こった、あるいは起こる出来事が認知されると、その出来事は *realis* の意味的文脈に存在し、直示的に表現される。しかし、現実世界で起こった、あるいは起こる出来事が話者の頭のなかで概念化された出来事になると、それは *irrealis* の意味的文脈に存在することになり、非直示的に表現される(歴史的現在とか習慣的現在として表現される)。他方、現実世界で起こっていない出来事が、話者の頭のなかで仮定の出来事として認識されると、このような出来事も *irrealis* の意味的文脈に存在することになり、非直示的に表現される(筆者が2020年に提案した思弁的現在などである)。これらの非直示的な出来事は、ともに、思弁的現在で表現されるが、筆者はこの2種類の非直示的表現を区別したい。それゆえ、本稿では、あくまで便宜的に、前者の概念的世界の非直示的表現を「思弁的現在 A」とし、後者の仮定的世界の非直示的表現を「思弁的

現在B」と呼ぶことにする。(非直示的現在という術語を採用して直説法現在の用法を説明することも可能であろうが、それでは、「直示的でない現在」という漠然とした意味しか伝えることができない。能動的・限定的に「思弁的現在」という術語で説明するほうが、その用法に存在する表現的特徴の違いを明確に伝えることができるであろう)。

すると、2.3でまとめられた現在時制の諸用法は、以下のように再提示されることになる。

1. 直示的現在 (realis の叙述様式に対応)。発話時に現実世界で起こっていると話者が知覚できる出来事を説明する (2.3.1 の用法)。
2. 思弁的現在 (非直示的現在。irrealis の叙述様式に対応)。
  - ① 思弁的現在 A：現実世界の出来事が反映されている。しかし話者は、発話時にはその出来事を知覚することはできない。現実世界で観察される習慣的出来事を知識として説明する習慣的現在 (2.3.2 の用法)、過去の出来事を、語るのではなくて、知識として説明する歴史的現在 (2.3.4 の用法。cf. 3.2.1) が含まれる。
  - ② 思弁的現在 B：現実世界で起こる出来事が反映されていない。無時間的・普遍的な真実として理解している知識を説明する格言的現在 (2.3.3 の用法) がある。頭のなかで思い巡らされた命題であるから、si 条件節で使用されたり (cf. 三好 2020)、por poco (cf. 3.2.2) とともに使用されたりする。また、発話時の現実世界では起こっていない未来の出来事を、予定という意味で説明する未来指示的現在 (2.3.5 の用法) も含まれる。

#### 4. 結論

筆者は三好 (2020) で、si 条件文に現れる直説法現在の時制の使い方を検討した結果、その用法は思弁的現在という使い方であると仮定した。思弁的現在とは、全時的な事柄を表現し、話者の眼前の現実世界で起こる出来事とは切り離されていて、話者の頭のなかの思弁世界で組み立てられた事柄を説明する用法である。本稿は、現代スペイン語における直説法現在の全用法のなかで思弁的現在はどのような位置を占めているのか、すなわち、思弁的現在という術語の概念を表現する直説法現在が、si 条件文以外でどのような表現のために使われているのかを検討した。

その結果、三好 (2020) で提案した思弁的現在という術語は、今回、本稿が検討の対象としている直説法現在の用法に関する限り、非直示的現在として直示的現在と併存しつつ、従来定義されてきた習慣的現在と歴史的現在を思弁的現在 A として、そして格言的現在と未来指示的現在を思弁的現在 B として表現する、という結論に達した。従来の直説法現在の用法分類を、直示性・非直示性という視点から、再分類する試みである。Comrie (3.1.2) の「習慣性を時制の対立によって表現する言語は存在しないし、全時的な真実を表現する普遍的な時制も習慣

的な表現を行なう時制も存在しない。(…。そのような) 解釈は、構文的要素や言語外的要素に基づいて起こるのであって、そのように解釈される内容は現在時制が意味するところではない」という指摘を考慮すれば、このような再分類にも意義があることになろう。

本稿によって、筆者が三好 (2020: 44) の結論の箇所ですべて予告した課題は解決された、と認められれば幸いである。さらに、従来から分類されてきた直説法現在の諸用法が、思弁的現在の A・B という新たな分類の視点から統合的に眺めることで、この時制が表現するとされてきた諸々の意味を再認識することができれば、本稿の再分類の意義も深まることであろう。

#### 注

- 1) ここで「説明」というのは、動詞の過去時制と現在時制を発話目的と関連させて、過去時制は語りの時制であって現在時制は説明の時制であるとする、Weinrich (1982: 71, 498) に従っている。
- 2) 直説法現在を使用する si 条件節を条件表現という観点から分析している論文に Mejias-Bikandi (2008) があるが、この研究者は、si 条件節で使用される直説法現在は、Asume por un momento que vienes conmigo。「私と一緒に来ることを束の間引き受けてくれ」の従属節の時制と同じように、特別な思考の試み (particular thought experiment) のための、語用論的断言の指示 (indication of pragmatic assertion) として使用されていると考えている (2008: 171)。このような指示は、筆者の仮定する思弁的現在の機能のひとつであると考えられよう (なお、Mejias-Bikandi の論文の存在は、神戸外大の福嶋教隆先生に教えて頂いた。記して感謝申し上げる)。  
 なお、三好 (2020) では、この思弁的現在は典型的 (プロトタイプ) な si 条件節の用法が扱われている。たとえば、エコー表現で話し相手の発話の一部を si 条件節にもってくるような、談話領域に拡張された非典型的な用法 (条件節に現実世界の出来事を設定する用法) は、検討の対象に含まれていない。
- 3) 大塚ほか (1982: 298) は、(deixis の項目で) Two and two makes four. のような文は直示的ではなくて、「誰が、いつ、どこで、どのような伝達手段によって (例えば、電話、テレビで)、また、どのような雰囲気、発話しようと、あるいはまた、受信しようと、それらのことは、原理的には、これらの文の理解に影響を及ぼすものではない」と述べている。
- 4) なお、三好 (2020: § 3.2.3) では、si 条件節で使われる直説法現在に対応する時は過去・現在・未来に亘っており、そのような思弁的現在は全時的な意味を表現する、とされている。過去・現在・未来においてその真理値が変わらないからである。
- 5) Elliott (2000: 55) によれば、irrealis という術語を最初に使用したのは Edward Sapir だそうである。Sapir は 1930 年に発表した論文のなかで、irrealis の叙法接尾辞は、動詞で表現されている活動が非現実的であること、すなわち単に可能性のあることや反事実的であること、を指している、と定義しているという。この定義は、たとえば三好 (2006: 8; 2019: 45-46) などで指摘されている。スペイン語の接続法の基本的な表現内容と合致している。すなわち、「単に可能性のあること」が未知型の用法に、そして「反事実的であること」が意外型に対応している。
- 6) なお、Veiga *et al.* (2006: 45) はスペイン語の叙法の分類で、直説法現在の時制は客観的で no irreal (すなわち real) な出来事を表現するとなっているが、本稿の解釈 (3.1.2) では、直説法現在が irreal な出来事を表現する場合もある。なお、歴史的現在に関連する興味深い資料のひとつに、都竹 (2018) がある。
- 7) Instituto Cervantes (2012: 309) は、Se cayó al río y por poco (no) se ahoga。「彼は川に落ちて、もう少しのところでおぼれ死ぬところであった」という例文とともに、この場合の否定語は余剰であるから削除可能であるという指摘をしている。なお、この問題については、RAE-ASALE (2009: § 48.11s-u) が詳しく論じている。

## 参考文献

- 大塚高信ほか (1882) 『新英語学事典』, 研究社。
- 高垣敏博 (監) (2007), 『小学館 西和中辞典』第2版, 小学館。
- 都竹恵子 (2018) 「英語における“Historical Present”と日本語における“歴史的現在”の比較」, 佛教大学『英文学論集』25, pp. 103-140。
- 三好準之助 (2006) 『スペイン文法中級コース』, 白水社。
- 三好準之助 (2019) 「スペイン語の名詞節における叙法選択」, 『京都産業大学論集』, 人文科学系列, 第52号, pp. 45-67。
- 三好準之助 (2020) 「si 条件節の直説法現在について」, 『イスパニカ』, 64, pp. 29-49。
- ヴァインリヒ, H. (1982) (脇坂豊ほか訳) 『時制論』, 紀伊国屋書店。
- Beinhauer, W. (1978) *El español coloquial*, tercera edición. Madrid: Gredos.
- Bosque, I. & V. Demonte (eds.) (1999) *Gramática descriptiva de la lengua española*, Madrid: Espasa-Calpe.
- Butt, J. et al. (2019) *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, sixth edition. New York: Routledge. Taylor & Francis Group.
- Comrie, B. (1985) *Tense*. Cambridge, etc.: Cambridge University Press.
- DLE: Real Academia Española (2017) *Diccionario de la lengua española*, versión electrónica 23.1, Madrid.
- Elliott, J. R. (2000) “Realis and irrealis: Forms and concepts of the grammaticalization of reality”, *Linguistic Typology*, Vol. 4-1, 55-90.
- Gili Gaya, S. (1973) *Curso superior de sintaxis española*, onceava edición. Barcelona: Bibliograf.
- Instituto Cervantes (2012) *El libro del español correcto*, Madrid: Espasa Libros.
- Lyons, J. (1977) *Semantics. Volume 2*, Cambridge, etc.: Cambridge University Press.
- Mejias-Bikandi, Errapel (2008) “Conditional sentences and Mood in Spanish”, *Journal of Pragmatics*, 41, pp. 163-172.
- RAE-ASALE: Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española (2009) *Nueva gramática de la lengua española*, Madrid: Espasa Libros. 『新スペイン文法』。
- Rojo, G. & A. Veiga (1999) “El tiempo verbal. Los tiempos simples”, Bosque & Demonte, pp. 2867-2934.
- Veiga, A. et al. (2006) *El modo verbal en cláusulas condicionales, causales, consecutivas, concesivas, finales y adverbios de lugar, tiempo y modo*, Salamanca: Universidad de Salamanca.

## 参照したコーパス

- Real Academia Española: Banco de datos (CREA). *Corpus de referencia del español actual*. <http://www.rae.es> [16 de diciembre de 2020].

## On the Spanish speculative present

Jun-nosuke MIYOSHI

### Abstract

In modern Spanish, the conditional verb (protasis) with *si* does not admit the present (perfect) subjunctive, nor the future (perfect) indicative, but the present indicative. In Miyoshi (2020) he examined in detail the semantic value of propositions expressed by this verbal tense, and he proposed that the expressive function of such a present tense is speculative. This paper investigates the use of this speculative present in other uses of the present tense, and we conclude that habitual present and historical present belong to the “speculative present A”, and that the speculative present proposed in Miyoshi 2020, the gnomic present where the narrative present employs *por poco*, as well as the prospective present belong to the “speculative present B”.

**Keywords:** present of indicative, real world, speculative world, *realis/irrealis*, speculative present (A, B)